

弥生時代研究と登呂遺跡の意義

篠原和大（静岡大学人文社会科学部）

はじめに

登呂遺跡は静岡平野南部に位置する弥生時代後期の農耕集落遺跡である。1943年に発見され、終戦直後に行われた発掘調査の内容は全国から注目を集めたが、その成果によって、「弥生時代の集落と水田跡が一体となった農耕集落の姿」が明らかになった。1952年に国の特別史跡に指定されて遺跡の保存がはかられ、復元整備が行われた。当時、登呂遺跡を基準に弥生時代の農耕集落像は形作られた。

しかし、1980年代以降、佐賀県吉野ヶ里遺跡や大阪府池上曾根遺跡といった「巨大環濠集落」のような弥生集落像が一般化すると、登呂遺跡が取り上げられることは次第に少なくなっていった。このような状況に対して、静岡市では、1999年から2003年に登呂遺跡の再発掘調査を実施し、新たに明らかになった調査成果をもとに再整備が行われた。この再整備は、登呂の集落の姿を、現在の私たちが利用可能な形で正確に再現したことに特徴がある。

この間の調査や研究によって登呂遺跡の地域社会形成史上の位置や弥生時代農耕技術史上の位置が明らかになってきた。そのうえで「弥生時代の集落と水田跡が一体となった農耕集落」の全体が遺される登呂遺跡はあらためて無二の極めて重要な存在であることが再認識される。そのほぼ全体が活用され、実験考古学の実践が可能な形で再現されたことによって、あらためて未来へ遺すべきその考古学的価値と意義が生まれつつある。

1. 弥生時代研究の黎明と登呂遺跡の調査

農耕文化としての弥生時代の研究は、1925年に山内清男が「石器時代にも稲あり」として宮城県梶形囲貝塚の靫の底部圧痕土器を紹介し（山内 1925）、その後弥生時代を「大陸との著名な交渉を持ち、農業の一般化した期間である」と述べたことに始まるといってよい（山内 1932）。その後森本六爾の弥生時代の低地農業の記述（森本 1933）もあって、急速にその内容の追究や編年の整備が進められた。そうした初期の研究に弥生時代の圧倒的な具体像を与えたのが、奈良県唐古遺跡と登呂遺跡の調査であった。1937年に始まった唐古遺跡の調査では遺構に伴う大量の土器とともに、鍬、鋤、杵などの明らかに農耕に伴う木製遺物が出土し、一遺跡の遺構単位の一括資料を基準とした編年研究が提示された（京都帝国大学文学部考古学教室 1943）。終戦を挟んで実施された登呂遺跡の調査では、住居跡や掘立柱建物を検出して集落の具体像が示されたほか、集落に接して広がる水田跡が確認された。報告書ではそれらの建物、水田が詳細に記載検討されたほか、木製品等の物質文化は唐古をはじめとした他遺跡の資料も含めてその全体像が検討されている（日本考古学協会編 1949、1954）（図 1）。登呂の「弥生時代の集落と水田跡が一体となった農耕集落の姿」は、弥生時代研究が初めて得た極めて具体的な弥生集落像として学術的にも評価されたのである。

2. 弥生時代研究の展開

登呂遺跡は発見と初期の調査の成果により、日本列島で農業が始まった弥生時代の集落の典型と考えられた。しかし、特に 1970 年代以降の大規模な環濠集落の調査事例などから一般的な弥生時代集落像自体が変貌していった。一方、全国的な調査・研究の進展により、弥生時代の全体像も次第に明らかになり、較正年代による年代観の見直しを経て、列島各地でのその変遷や地域性も明らかになってきた。登呂遺跡の再調査はこのような研究

動向の中で行われ、新たな弥生時代観の中で再評価されることともなった。

現在、日本列島の水稲耕作を中心とする農耕文化は、紀元前 1000 年紀に韓半島南部から北部九州に伝えられたと考えられている（宮本 2009 など）。この初期の農耕は雑穀畑作と水稲栽培の複合であり、弥生時代前期（BC8 ～ 5 世紀頃）に日本列島に広がっていくが、この時期に本格的な灌漑水稲耕作が成立するのは西日本までであって、登呂遺跡の位置する東日本の太平洋岸では、本格的農耕社会は弥生時代中期中頃（B.C.3 世紀頃）に成立する（石川 2001、中山 2018 など）（図 2）。登呂遺跡の位置する東海地方東部でも、弥生時代前半は小規模な畑作や水稲作と他の生業が複合した社会であり、弥生時代中期中頃に本格的な灌漑水稲耕作を開始したとみられる大規模な集落が現れてくる。さらに、登呂遺跡が形成される弥生時代後期（A.D.1 ～ 2 世紀頃）には、急速に鉄器が普及したとみられ、各地で集落の増加や移動などの変化がみられると考えられるようになった。

3. 静岡平野の農耕形成モデルと登呂遺跡の位置

登呂遺跡周辺では、戦後の調査で登呂遺跡より古い時期の遺跡として北方 500 m ほどに位置する有東遺跡が発見されており、登呂遺跡は有東遺跡を母村として分かれた子村であると考えられていた（日本考古学協会 1954）。その後調査が進むと有東遺跡は弥生時代中期中頃に形成された大規模な集落であることがあらためて明らかになっていった。有東遺跡では大陸系磨製石斧を大量に生産し、それを加工具として木製農耕具を生産していたことがわかる。登呂遺跡周辺の本格的な農耕は有東遺跡から始まった。有東遺跡は弥生時代後期になると急速に縮小するが、これに呼応するように周辺には登呂遺跡をはじめとした集落群が成立する（図 3）。こうした弥生後期の遺跡から出土する石器は極めて少なく、一方で出土する木製品の多さからもこの時期急速に鉄器が普及したと考えられている。鉄器の普及によって木製農具の生産が効率化し、集落が分散化するとともに一気に開発が進んだとみられる。登呂遺跡は、このように弥生時代後期の鉄器の普及により開発を拡大させた地域社会の最前線の村であった。

登呂遺跡の集落は 2 世紀前半頃に起こった洪水によって埋没した。その後もさらに埋没し、地下水位が高い状態で保存されたため、村の構造とともに木製品などの有機質の遺物が良好に残っていた。発掘された建物と構築材、土器、農具などの道具類、布などの通常は残りにくい生活用具に関する資料、生産を直接示す水田等々、当時の生活文化を示す遺物も極めて多い。また、再調査で祭殿跡が発見されたことにより、卜骨、琴、剣形などが用いられた共同体祭祀の姿が復元できるようになった（図 4）。登呂集落の中心広場に造られた祭殿で行われた祭祀は、登呂遺跡のみならず、有東遺跡から分かれた集落群で形作られた静岡平野南部の農業共同体を主体として執り行われたことが推定できる。登呂遺跡に祭殿が造られた時期、登呂の集落は地域的な農業共同体の中心的な役割を果たしていたのである。

4. 登呂遺跡の研究面での活用と実験考古学

登呂遺跡の再発掘調査の内容に基づき行われた再整備では、弥生時代当時の状況に近い形で集落とともに水田域も復元された（図 5）。この登呂遺跡の実寸大で利用可能な形で復元された環境を活用して、さらに豊富に出土した道具類などを復元して使用し、弥生時代当時の様々な生業活動を再現・検証する実験考古学が可能である。すなわち、登呂遺跡でさまざまな実験考古学を行い、弥生時代の生活環境を復元研究していくことは、今後の弥生時代研究のミッションであるともいえる。

登呂遺跡の調査成果からどのような生活環境の復元が可能かという問いに対しては、2007 年から 2010 年にか

けて現在の研究状況に照らして検討をおこなった結果として『ようこそ登呂ムラへー登呂遺跡の生活復元図鑑一』（通称『登呂図鑑』）が刊行されている（静岡市教育委員会 2011）。ここで取り上げた建物や水田の構造、衣食住に関わるものの製作と使用法、様々な生業や祭祀とその上部の社会構造は、いずれもその一部や全体を登呂遺跡における実験考古学としてさらに研究を進めることができる内容であり、現在の登呂遺跡研究の主要な課題でもある。現在登呂遺跡で実践されているのは復元水田を使った栽培実験や耕起実験である（図 6）。実験は再現された環境の中で部分的にしか行うことができないが、それを登呂の集落の全体に戻してシミュレーションすることで、容易に全体の推定が可能になることにも登呂遺跡で実験を行う意義があるといえる（篠原 2021 など）。

おわりに

登呂遺跡は日本考古学の歴史における記念碑的な存在であることは、今後も変わることはない。一方、弥生時代研究は、登呂遺跡が韓半島南部から伝来した農耕文化が列島に展開した一つの到達点であったことを明らかにした。登呂遺跡は「弥生時代の集落と水田跡が一体となった農耕集落」の全体が、極めて良好な状態で保存されていた重要な遺跡であることもその価値は失われないものであり、50 年以上にわたって保存されたのちに再び調査されたことが、多くの情報をもたらしたことは、このような史跡の保存と整備の意義を示すものでもある。さらにあらたな整備によって、より弥生時代当時に近い形に復元された水田や集落は、高い時間的・空間的な再現性を容易に確保できる実寸大の実験考古学のフィールドとして考古学研究の未来においても高い価値を持っていることが示されつつある。このように史跡としての伝統と価値を兼ね備えた登呂遺跡が、「実験考古学の聖地」としてまた新たな価値を創造していくことが期待される。

《参考文献》

- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第 113 号
- 岡村渉 2014 『弥生集落の原点を見直す・登呂遺跡』新泉社
- 京都帝国大学文学部考古学教室編 1943 『大和唐古彌生式遺跡の研究』
- 静岡市教育委員会 2011 『ようこそ登呂ムラへー登呂遺跡の生活復元図鑑一』
- 篠原和大 2019 「農耕文化の形成と登呂遺跡」『大学的静岡ガイド』昭和堂
- 篠原和大 2020 「登呂遺跡を活用した日本列島初期農耕文化についての実験考古学的研究」『人類誌集報』14
- 篠原和大 2021 「- 弥生水稲農耕集落モデルの再構築 - 登呂遺跡の実験考古学」『人類誌集報』15
- 中山誠二 2018 「栽培植物からみた日本列島の農耕起源」『境界の考古学』日本考古学協会 2018 年度静岡大会実行委員会
- 日本考古学協会編 1949 『登呂 前編』
- 日本考古学協会編 1954 『登呂 本編』
- 宮本一夫 2009 『農耕の起源を探る』吉川弘文館
- 山内清男 1925 「石器時代にも稲あり」『人類学雑誌』40-5
- 山内清男 1932 「日本遠古の文化」『ドルメン』1 巻 4 号
- 森本六爾 1933 『日本原始農業』

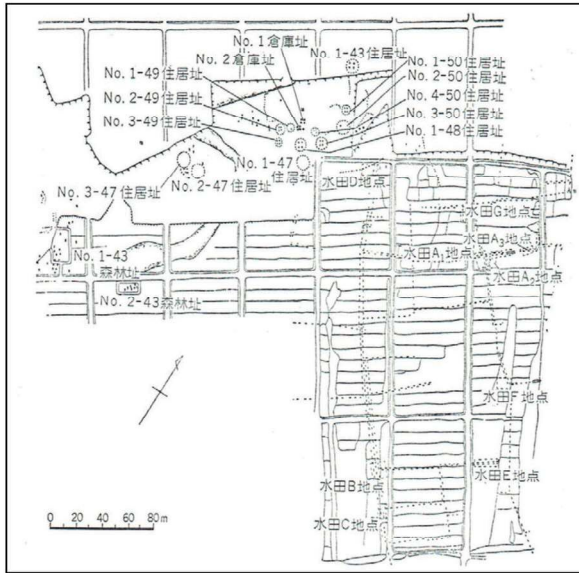


図1 登呂遺跡全体図（日本考古学協会 1954）

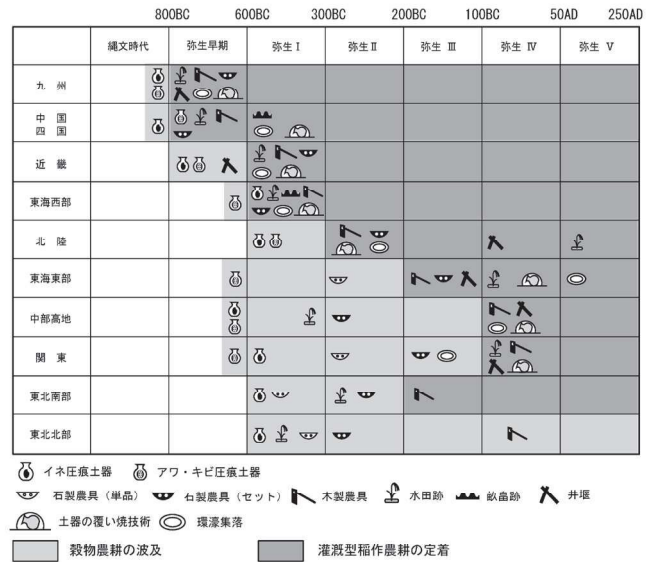


図2 穀物農耕の波及と定着（中山 2018）

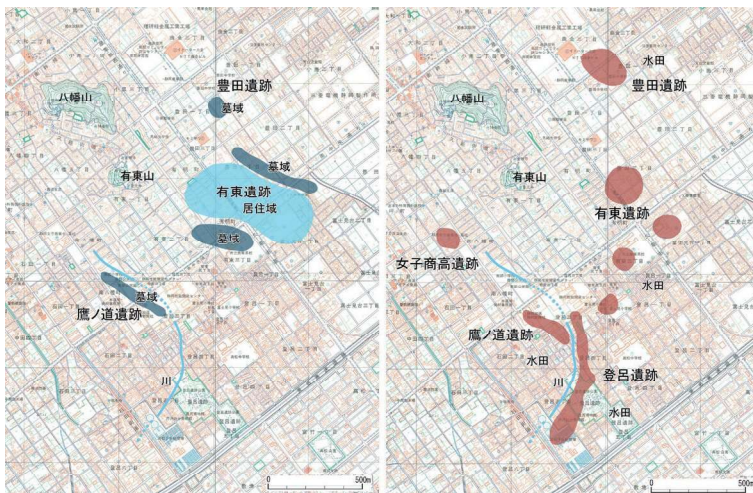


図3 登呂遺跡周辺の弥生時代中期（左）から後期（右）

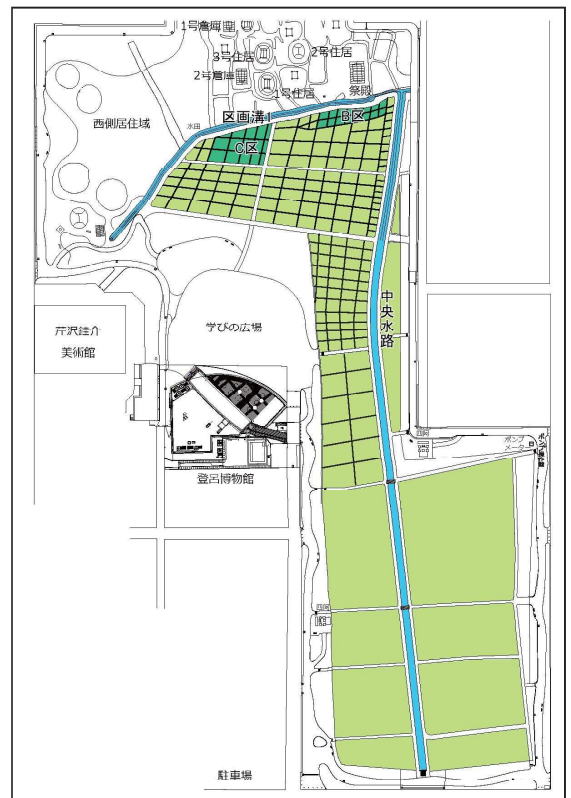


図5 登呂遺跡復元水田と水路

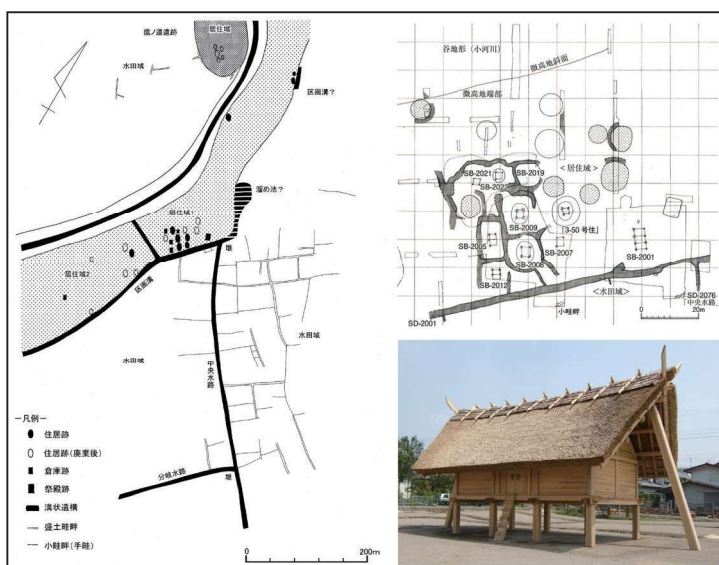


図4 再調査にもとづく集落復元（左）と集落中心部（右上）
復元された祭殿（右下）（岡村 2014 ほか）



図6 耕起実験の様子